

で品良く大らかだ。昭和54年度の芸術祭参加番組として、10月23日国立小劇場において三度目の芳一の会を開き、清元「北州」歌沢「紀伊の国」義太夫「閑寺小町」を舞つた。



花椒芳一齋

また、10月30日に国立芸場で松本尚女師が地唄「山姥」「隔」の二曲で参加、五回目の挑戦。中堅の尾上菊見師も10月27日に尾上菊見リサイタルとして清元「お夏」長唄「石橋」の二曲で参加、引き続いて尾上菊見舞踏会を開き、東京の稽古場も今年から持つなど地についた東京進出。

11月1日にはモダンダンスの今岡頌子さんが、「翅膀お七」「雪の杜若」で加藤よ子さんと共に意気を叶いた。

★若柳吉童、吉金吾の
襲名を祝う会開く
「えっさほっさ」の掛け声
に初代若柳吉童師と二代目
吉金吾さんが、ホエホで乗
つて会場へ登場するとチヨ
ンと木が鳴って「おめでと
うございます！」と拍手が大
響く。



注目を集めた東京での記者会見

「旅行アサヒ」創刊発表
全国のタウン誌11社が結集して出版する、旅の文化誌「旅行アサヒ」は、11月1日に発行された。27年前の大晦日に自殺した「旅のアサヒ」の元編集長・久坂葉子が、死後も活動を続ける姿が、この誌に現れる。

試験「旅行アサヒ」にいよいよ
登場する。会見
た神戸の作家久坂葉子（享
年21歳）への熱い思いを込
めた論考や久坂の作品など
が掲載されている。

東京での記者会見の模様

美術
ガイド



★県立近代美術館	前田寅治展	11	17	12
★西宮大谷記念美術館	エジプト・コブト織の美展	11	23	12
暮しを楽しむ小品展	★KCCアートギャラリー	12	1	25
具象ひげプロ写真展	★KCCギャラリー	12	1	12
海星女子学院写真展	具象ひげプロ写真展	12	1	12
御影工業高校写真部展	★キタノ・サーカス	12	1	12
★ギャラリーあじさい	黒瀬利展	12	2	12
★ギャラリーさんちか	★ギャラリーさんちか	11	1	12
二元会展	二元会展	12	8	12
ブータン王国の印象	★ギャラリーさんちか	12	8	12
主体美術兵庫作家展	二元会展	12	1	12
ハッセル・ブライド写真展	二元会展	12	1	12
ナッシュ・マーラヤ、ネバーラスケ・フチ	ハッセル・ブライド写真展	12	22	12
水彩連盟兵庫支部展	ナッシュ・マーラヤ、ネバーラスケ・フチ	12	12	12
★ギャラリー・ド・ラ・ベ	ナッシュ・マーラヤ、ネバーラスケ・フチ	12	26	12
★芦屋ギャラリーへて	ナッシュ・マーラヤ、ネバーラスケ・フチ	12	6	12
フランス版画ミニアチュール展	★そこそく神戸美術画廊	12	3	12
現代丹波源抜陶芸展	★そこそく神戸美術画廊	12	8	12
迎春用掛軸・初釜用茶道具展	迎春用掛軸・初釜用茶道具展	12	5	12
彌寿記忠	彌寿記忠	12	12	12
★大丸神戸展示美術画廊	★大丸神戸展示美術画廊	12	12	12
藤原路展	藤原路展	12	12	12
肉筆浮世絵名品展	肉筆浮世絵名品展	12	6	12
★三越神戸店美術画廊	★三越神戸店美術画廊	12	7	12
明治・大正・昭和有名作家日本画展	明治・大正・昭和有名作家日本画展	12	4	12
		17	11	

★いきいき絵草紙源氏物語

白い衿に、薄紫のやわらかな衣を重ねた夕顔は、華奢でいたいたいばかり織

細な美女である(夕顔より)

絵草紙『源氏物語』は田辺聖子の書き下し150枚の文

章と新進気鋭の岡田嘉夫がイラストレーターの情熱を

注入したオリジナル作品90

点による

画期的な豪華本(角川書店 定価4800円)。岡田さん

(35歳)は神戸生れ長田高校卒、中西勝画伯に師事したこともある神戸っ子。現在東京在住だが苦心の絵草



岡田嘉夫さん
岡田嘉夫夫婦の
オリジナル作品90

紙『源氏物語』の完成に故郷神戸で1月17日から22日、神戸大丸で原画展が開かれます。

★神戸で「イカラスの会」

フォークシンガーやだま

さしさんが'80新春に公開の映画『翔べイカラスの翼』

(制作・翼プロダクション)に初

出演。10月27、28日に「ア

ン・ドウ・トゥアード」に

於て「イカラスの会」が開

かれ約50名のファンが集い

レコードコンサート、製作

発表時の特報フィルム上映

平塚ロケ参加者の報告など

楽しい時間を過ごした。この映画はキグレセーカスの

花形ピエロで惜しくも28歳

の研究学園都市を求めて「実力派経済人のわ

が関西ビジュン」などで

最後にミニト神戸特集が

登場「21世紀の海上文化

都市に賭ける」となって

いる。そして、しめくくりは「ポートピア'81をア

ロデュースする」という

小林公平(ポートピア'81

のアーティスト)の「神戸のポートアーランドの総合プロデューサーのインタビュー記事と出展館の紹介などでまとめられ

の若さで世を去った栗原徹の実話をもとにしてお

り、さださんは主役を演じると同時に音楽も担当。

「イカラスの会」⁰³³¹⁻⁶¹⁰

★レディースサウナの美容体操カレンダー

生田新道のレディースサウナでは、お正月の初風呂に入りにきた人先着200人にサウナコース500円割引券が12枚ついたビューティ・カレンダーをプレゼント。カレンダーの裏にきれいにやせられる美容体操の図解がついている。

「今年こそスラリと!」と決心をしている女性は是非この機会に。

お問い合わせ番号 321-4742

年始1月2日より営業

ズアップされており、現

実に21世紀に取組んで急

展開する神戸の情況を伝

えて素晴らしい効率的都

市経営であり「株式会社

・神戸市」の面目躍如で

あるとしている。

確かに他の関西復権論

にひきかえ新空港論と神

戸のポートアーランドの

記事は裏付けがあるだけ

に生彩がある。しかし、「株式会社・神戸市」の功績もよくわかるが、もう少し市民が登場する記事があればと思つたこと

である。

△YV

●KOBE POST

★十月二十七日から十一月三日まで津高和一画伯は、西宮の自庭で、△架空通信・対話のための作品展を開催。名塩義鳥の作品による造型を試行。今年四月ワシントンOKADA、SHINODA AND TUTAKA (Three Pioneers of Abstract Painting in the 20th Century)に出席。五月、二、三、兵庫

大病院に直腸周囲癌でまた入院、やつと体調改後しての個展でした。『架空通信講座』や季刊『架空通信』の停滞も病気が原因。

★「食って食って食いまくれ」歌手の美術探求の旅に出でて松山善三

氏が、光文社から「一九松山ガイドつきの食べある記を出版。八月七日、『神戸の『翼』』もん明

石の『菊水鮒鮓』の顔が見る

詩人の赤松徳治氏が、詩集『痛み遠くまで』を神戸市立図書館セントラル(〒65700神戸市灘区中原通七ノ一ノ七赤松方)より発刊。

★神戸の家(鶴鳴體)が、東京赤坂急須ホテル(花くま)で開

て十周年を迎へ、十一月十二日には花くま東京店十周年記念の会を開いた。芸文春秋社の「東星い

い店うまい店」でも最高の「東星となり、ますます美味求真にいそ

しまして。★大森流飯家、海星女子学院出身の太平洋美術会員、迫平陽子

さん(埼玉県在住)は出身地の神戸で初の木版画展を開く。十二月十一日(火)～16日(日)迄。ギヤラリ

★十一月二十二日午後六時より楽園会館で神戸文化ホールが「屋根の上のヴァイオリニン弾き」上演

記念に歓迎者との心温まる交流会を開催。森繁久弥ら出演者との心温まる交流会

★辰野彦彦・ゆかりさん(転落死)が転落死されました。丁度西宮市殿山町八番

22号⁰³³⁰⁻⁷¹²²に七〇二二年三月二二日午後六時より屋

根の上のヴァイオリニン弾き」上演

映画評論家荒川長治氏が受けられました。おめでとうございます。

★ピアニストの井上俊一さん(かみ

音オーブン)が神戸らしい店づくりが

面でSOUND INN(英國館)をオープン。おめでとうございます。

27-12-1-1-49-2

07



たのしい クリスマスの
うれしい プレゼントは
おもちゃの カメヤで



クリスマスのご用意はお早めに
地方発送承ります。(市内無料配達)

オモチャの



■三宮方面でのお買物は…
さんちか店(ファミリータウン) ☎391-4045
三宮店(センターブラザ) ☎331-4969
■元町方面でのお買物は…
元町店(元町通3丁目山側) ☎331-0090
元町東店(元町1番街不二家前) ☎391-0768
■神戸駅前方面でのお買物は…
サンこうべ店(神戸駅前地下街) ☎351-6002

Hat dog



なんすい
軟水のCoffee
味、また格別。

営業時間 午前10時～翌午前2時



コーヒーhaus
ハットドック

バス停(中山手1丁目)南側角
☎ (078)321-1689

ル・ポルタージュ

●知らぬ人の神戸 / 最終回

六甲山全山 縦走コースより…

蒼

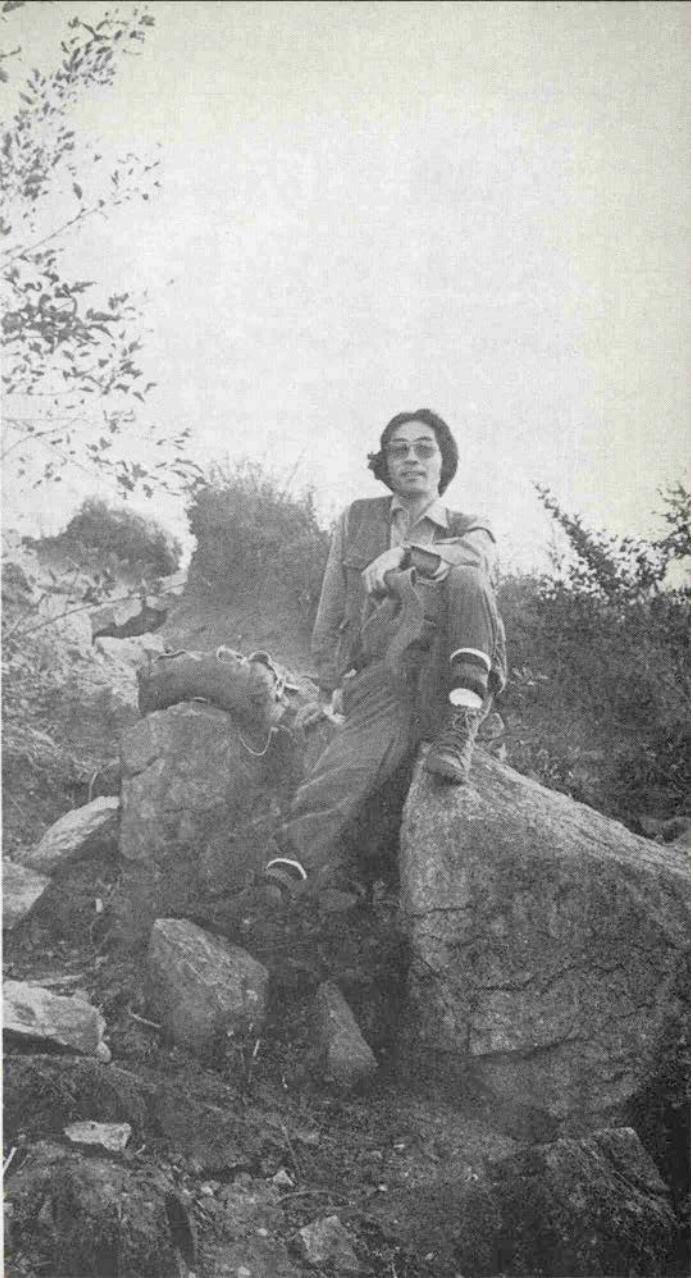
龍

カメラ / 緒方しげを

全山縦走コースを歩いてみて、また新たに神戸の魅力を感じた。このような海と山を持ち、日々の生活の中にそれを組み入れている人々の知恵を想う。山と言つても峻険な信濃の山々とも違うし、海といつても、日本海の暗い海とも違う。瀬戸内の晴天の多い空

の下で、人情に染めぬかれた明るく優しい海であり、山である。私は縦走コースの山上に度々立ち止り、眼下に広がる街並みや海を見下しながら、いろんなことを思つてみる。この一つに、私の脳裏に浮かんだ眼前の光景とは全く異質な一風景があった。それは、太宰治が、

極楽茶屋へ至る道にて



「津軽」を書くために故郷を訪れ、バスの窓外に北津軽の景色を見て感じたものであった。太宰は書いている。

「人の肌の匂いが無いのである。山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係に生きている。」これは、風景の一歩手前のものだと言っている。それに比べて、私の目にする、コナラの木もウラジロの木も、紅葉したヤマハゼも、笹の葉一枚に至るまで、總てここにおいては、人間と無関係には有り得ない。人と話し、語りかけ、幾多の人情に染め抜かれた、優しい風景、そのものと言える。

私は山を歩きながら、これ程幅広い多くの層に親しまれ愛されている山を見たであろうか。下はまだ小学校に上る前の幼児から、上は八十歳近い老人にいたるまで、男も女も、それぞれの仕方で山を歩いているのである。ハイキングの歴史が、古いのである。道連れになつた老人に聞いてみても、月に最低二度は山に登るという。もう何十年も登つているが、年代によつて登る山が変化したとも語つていた。一口に何十年と言つても、人生の道はそう平坦なものではない。恋をしていた若い頃もある。子供のことや職場での人間関係に苦しんでいた時もある。戦争で跡絶えた時期もある。連れ合いに別れた哀しみを踏みしめて登つた人もいたろう。人生のいろいろな思い出の回想を山歩きに求めた人もあつたろう。このように六甲山は、人生のその時その時の楽しみや悲しみを受けとめて、人はまた自分たちの思い出の層が、幾重にもこの山に焼きついているのを見る。山は優しい。風景は余りにも美し過ぎる。人もまた多くを知り過ぎると、優しさと寂しい心を片隅に抱くものだ。優しく美しい海と山に閉まれた人達の心の内が、私には何となく分るのである。私は神戸が好きだ。道行く人も、山も海も、見知らぬ人の私を、このように憩わせ、やすらわせてくれる。そのような街は、少ない。

六甲山全山縦走五十六キロと聞いた時、私は正直言つて二の足を踏んだ。しかし、編集部に学生時代からの女

登山家が居て荷物を持つてくれるとか何とか言つて、宥めすかされているうちに、なんとなくその気になつた。

ただし全縦コースを何回かに分けてもという条件で、とにかく塩屋から宝塚まで歩くことになった。第一回目は、「六甲全縦市民の会」のお世話をしてくれる、神戸大医学部の村上宏先生以下五名のパーティで、菊水山頂からカントリー・ハウスまで歩いた。朝八時、露に濡れた草を踏んで歩み出しは、なかなか快適なものであった。特に九時頃ついた菊水山山頂からの海の眺めは、思わず息を呑むほどの素晴しさであった。濃い重油か何の広大な海上に、数知れぬ紋白蝶が舞いおり、朝日を浴びて静かに羽博いているような光景であった。その後も、太陽が上るにつれて、樹間に現われ、あるいは稜線から見晴かす海の光景は、ガラスの破片をばらまいたようになつたが、それだけに朝の輝く海の光景は、鮮やかに私の脳裏に焼きついている。

菊水山から有馬街道をまたぐ天王吊橋を越え、急な坂道を鍋蓋山に向かって上つて行く。逆方向から来るハイカーとすれ違い、また後ろから追い抜いてゆくグレープも多くなつた。鍋蓋山付近では、道脇にヤマモモが植樹されている。三百本が天王吊橋完成記念として植えられたらしい。その基金は、金山縦走参加者からの醸金によつたとか。山の小径に木を植える、その行為一つをとつても、神戸の人達にとっての、これらの山の在り様が、読みとれるようだ。鍋蓋山を過ぎて、空海が入唐前登り帰朝後再度登つたのでその名がついたという再度山には十時半。お昼は市ガ原でとつた。この調子では、全山縦走の宝塚到着は翌朝になることである。星からは少しピッヂをあげ、天狗道から摩耶山、アゴニ坂と、かなりしんどい行程であった。村上先生について行くのが精一杯である。私は情けない気持になつて、よく山に行つていた頃のことを思つていた。あの頃、といつても

ずいぶん昔のことになるが、私は毎晩五キロは暗い山道を走っていた。今思えばずいぶん偏屈な生き方をしたものが、会社の同僚などとの麻雀や、飲み屋での交際は一切しなかった。三度に一度はつきあうのが常識だろうが、私の場合は十度に一度。そのうちに誰も誘わなくなつた。会社の若い女の子なども、「あの人生活態度の冷めたさは何とも言えないわね」と、聞こえよがしの陰口をきいたりもした。しかし、それも長くは続かなかつた。人間など他愛のないものだ。「彼奴はあいいう人間なんだ」という評価が決まってしまえば、そこに乗つからつて生きて行ける。私は夜道を、ひたすら走つた。そして本を読み、休日には山へ行つた。私の体はバネのように疲れを知らず、山へ登つても、腰を下ろして休む必要などはなかつた。あの孤独な、自分を作つて行くような期間がなかつたら、私はその後に続く異国での無茶な生活に、とても三年余も耐え切れなかつたであらうと思う。

二回目はカンツリー・ハウスから宝塚までを歩いた。前回と同様距離にして十七キロ余りである。奈良から出かけて行く関係上、歩き始めるのが昼前ということになる。一時間ほどで六甲最高峰。そこで昼食。ちょうどどこかの大学山岳部が宝塚の方から砂を詰めた大きなリュックを背負つて、はあはあ息を切らして到着した。新人部員などは、顔面蒼白になつてゐる。あれ程違うものかと思う位、上級生には余裕が見られる。全員リュックから砂をあけた。

芒の穂波が美しい。三十年ぶりに日本に帰つて来た老人が言つてゐた。「故郷に帰り裏山に登つてみると、山から見下す稲穂が風にそよいで、海のように見えた。途端に涙が頬を伝つて、何も見えんよくなつた。」老人はアメリカで庭師をしていて、私は彼の訪日の間だけ、彼に代つて顧客の面倒を見ていたのだ。それつきりの付き合いだったが、老人の言葉は不思議に記憶に残つてゐる。

宝塚への道は下り坂が多い。私はこの日運動靴で來た

ことを後悔した。下りでは足の爪先を傷めるのである。案の定、足の小指が疼き始めた。棚越新道を越えて暫くした時であらうか。木暗くなり始めた山中に今年大学のクラブ練習中に死亡したとかいう木の立札があつて、その前に菊の花が供えられているのを見た。私は六甲頂上で山岳部の連中を見てから、彼らの姿と二重写しに思い浮かぶ二人の姿があつた。死んだ者は歳をとらぬというが、やはりNもKも若い学生時代のままなのだ。私は汚れた学生服を着ていてもあつてか、みんなは「オンボロ」という綽名で呼んでいた。無類の山男であつた。Nは学部の後輩で、これも無類の山好きで、さっぱりした気性の男であつた。先に卒業した私が、大阪で教員をしていた時に、卒業旅行でやつて來て泊つていつた。自転車で駅まで送つてやつた彼の重さを憶えている。その三ヶ月程後、彼らは冬山に入り、日高で雪崩に遭つて死んだ。NもKも父がなかつた。Nは放送局に就職が決まり、母親は背広をつくつて待つていたという。みんな四回生だつた。社会に出る学生時代最後の山行きだつたのである。リーダーのBは、雪の中で二日間生き埋めになつて、手帳にメモを書き残していた。BはNやK等に詫びた後、両親には、死んでも必ず何かに生まれ代つて、お父さんやお母さんを見守りたいと書き残していた。一昨年北海道に行き、バスで日高を越えた時、バスガールが、その時の遺書を読んだ。「白い荒野」であつたか、歌も作られたらしいが、遺族のあまりの悲しみのために売られることはなかつたという。

三回目、余すところは、塩屋から神戸電鉄の菊水山駅までである。私は風邪を引いていて、体調はすこぶる悪い。奈良から行つて塩屋で電車をおり、山にとりかかつたのは、もう既に正午であつた。平日でもあつたので、山は人がほとんどいなかつた。旗振山では、ロープウェイやリフトが定休日で、無人の遊園地を晴天の下に見るのは、また趣深いものがある。展望台から、菊水山で見



六甲山は、人生のその時その時の楽しみや悲しみを受けとめて、人はまた自分たちの思い出の層が、幾重にもこの山に焼きついているのを見る。山は優しい。

たような澄んだ海に再び出会って、私はあくことなく眺めていた。この度、もう一つ眺めたものに、山はぜがある。明るい空に、紅葉した葉を雪の結晶の如くひらいて、ちっちゃな実も、美しい。久しぶりに、一人でよく山に行つて来た頃を思い出した。体の調子もよくなつて來た。

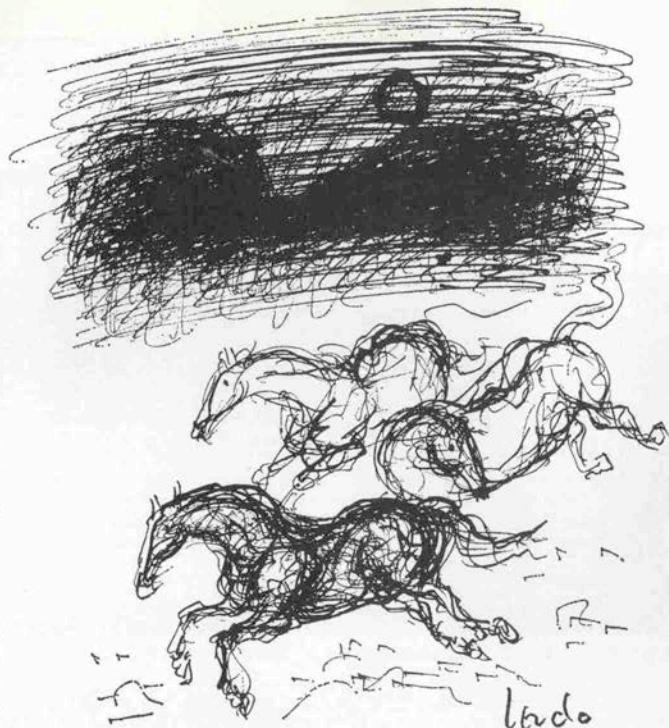
鉢堀山では、"おらが山毎日登山会署名所"というのがあつて、神戸の人達がいかに山を楽しんでいるかが分る。全国に山多しといえど、神戸の人達のような山の楽しみ方をしている土地は、まだ聞いたことがない。自然と調和し、それを生活の中に組み入れてしまう神戸っ子の知恵と、バイタリティーに私は拍手を送りたい。そういうえばこの六甲全綫コースは、すべて神戸っ子の裏庭のようなものなのである。毎朝、いかに多くの人達が山上つているか、他所の土地の者は考えられないことなのだ。彼等は出勤前のひと時を、極く気軽な気持で山に登つてくるようだ。

他にも高倉台の、あのお伽の国のように奇妙に澄んだ明るさ、須磨アルプスの岩場、高取山からの眺望、それらも印象に深いが、今は紙数も尽きた。

山岸外史は、親友の太宰治に「世の中で一番美しい言葉はさようならである。」と、絶交状を書いたが、遠き別れに「アディオス」と、また会える友に「アスター・マニヤーナ」と区別して使う南米の友のように、私も敢てアスター・マニヤーナと言おう。ではまた、お会いする日まで、お元気で！
(有り難うございました。一応今回をもつて「知らない人の神戸」のルポを終ります—蒼)

掌の旅

奥野 忠昭
絵・犬童 徹



トア・ロードと標識の立っている広い道をまっすぐ歩いた。両脇のビルの屋上は夕日に染められ、道路の暗色とは対照的だった。

私はふと幼い時期に過ごした谷間の村を思い出した。ちょうどあの村もこんなふうに両側から高い山に狭まれ、その山頂がいつも夕日に輝いていた。

【きれいじゃないか】

私が言った。妻は歩みを止め、ちらっと屋上を見上げたが、すぐに単調な歩みへと帰っていった。疲れているのだろう。ほとんど見知らぬ私の親類の人々に交じって、会話するだけでもたいへんだったに違いない。それにもう余命幾許もない叔父のやつれた姿やそれを取り囲む家族たちの悲しみの中にいると陰鬱さが滲み込んできて気持ちをめいらせててしまう。

しかし、そんな気分もすぐに吹き飛ぶだろう。海の広がりや白い波のしぶきを見ると、きっと心も和むに違わない。

それにしてもあの女はいったい誰だろう。確かにどこかで会ったような気がするが、どこでだかまったくわからない。

私はそっと後ろを振り返る。やはり女はこちらに向かって歩いてくる。

先ほど時間待ちのためちょっと立ち寄った喫茶店にあの女はいた。私がそこに入ったとたん、彼女が眼に入り、はつとした。駆が強ばり、じんとした痺れが駆中を走った。どこかで見たことがある。かなり親しく話したことがある。そう思えた。だが、どこでだったか、誰だったかわからなかつた。

彼女の方も私も気づくと驚いて何か言おうとしたが、続いて入ってきた妻を見ると、あわてて下を向き、それ以後私の方を決して向かなかつた。

女の横には数人の女子学生が坐っていて、大きな声でしゃべり合っていた。ほとんどが食べ物の話だった。

女は私の後をつけているのだろうか。それともただ偶然に同じ方向に行くだけなのだろうか。

「港だわ」

妻は大きな声を出した。

「海が見える」

大型の船を浮かべた海が空の方まで拡がっていた。私は先ほどビルを眺めたとき谷間の村を思い出したことを恥じた。村は山に囲まれ、決して海など見えなかつた。海岸通りを右に折れた。道の広い割には人通りは少なかつた。

「ほんとに船が出るの」

「丈夫、確かめてあるんだから」

「早く家に帰らないと、お姑さんが気嫌が悪いわよ」

「いいじゃないか、たまに来てもらっているんだから」

「そろはいかないわ、子どもを見てもらっているんだし」

妻の顔は沈んでいた。海を見ているのに家の部屋を覗いているようだつた。

「あんなときはいいわね」

「ええ」

「今先ほど、喫茶店で会つたでしよう。陽気にしゃべりあつていた若い人たち」

「ああ」

「うらやましいわ」

私は黙つた。顔をしかめた妻の額の皺に狂気じみた熱氣をちらつと読み取つた。

「だからさ、新婚旅行でもするつもりで船旅をするんじゃない」

「たつた一時間の新婚旅行」

「いい思いつきだらう。自分でも感心しているくらいさ」

本心そう思つていた。妻と二人で何かをするということが最近なくなつていて。お互、別々のことを考え、別々の仕事をしている。

「見てみろ、夕日がきれいだ。アーベント・ロートさ

妻は見なかつた。せかせかと歩みを速めた。

「すぐだと言つてたのに、ずいぶんあるじゃない」

「ほんとだ。こんなにあるとは思わなかつた」

歩道橋を渡るときもう一度後ろを振りかえつた。女は大股に風を切つて歩いてきた。髪の毛は黄金色にきらめいて、長くなびいていた。

それを見て、また私は谷間の村のことを考へた。

村には一年に一度祭りがあつた。山の頂きにある細長い広場を馬たちが駆け廻つた。まわりに人々が群がり、歓声をあげながら馬の尻を竹や鞭でぶつた。馬はいななき必死で走つた。村の若者は振り落とされまいと馬のたてがみにしがみつき、わきばらに駆を寄せてけんめいに走つた。ときには倒れた若者の上を馬が飛びはねていくこともあつた。

見物人も若者も子どもたちも馬も、みんな熱狂し、絶叫しあつた。

「なにしているの。はやくいらっしゃいよ」

妻は歩道橋の途中で、まだ降り始めていない私を不服そうに待つた。私はあわてて階段を降りた。

ようやく港に着いた。船はあと二十分で来ることがわかった。待合室には人々がたくさんいたが、彼らはみんな遠い島へ行く人たちだった。私たちのように鉄道が発達し、それに乗ればわずか四、五十分で到着できる街へ船で行くなどという物好はいなかつた。船会社だってそんな客をあて込んでいるわけではなく、ただ遠くからの

船客にその街へ行きたい人もいるため、少し航路を延ばしたにすぎない。

「ちょっと旅をする気分になるだろう」

「まさか。あなたの子どもじみた遊びにつきあってあげただけよ」

「そんなふうに言うなよ。君のためだと思つてやつたことなんだから」

「電車なら、もう帰り着くころだわ」

「早く帰つたって、どうつことはないじやないか」

家で何もしないあなたにはわからないのよと言われそで、あわててコーラを買って妻に渡した。妻は

無表情でそれを飲んだ。あき缶をごみ箱に捨てる、妻は週刊誌を広げた。

私は新聞を読んだ。離婚のもつれから別居中の妻を殺した男の記事が載っていた。子どもの目の前で嫉妬に狂つた夫が隠し持っていたナイフで妻を刺した描写が生々しく、男の情念のすさまじさが目に浮かんだ。

「ばかなやつもいるもんだよ」

私はその記事を指さしながら新聞を妻に渡したが、妻は見出しだけをちらつと見ただけで返してよこした。

「世の中にはいろんな人がいるものよ」

妻は週刊誌に熱中していた。

私は待合室を見廻した。だが、女の姿はなかつた。やはり偶然、こちらに向つて歩いてきた見も知らない女に違ひない。私の思いすごしだつた。

船が着き、たくさんの人たちが降りてきた。だが、乗る人は私たちだけだった。

船室にはまだ多くの人たちが残つていたが、みんな疲れた顔をしていた。

デッキに出ると、若者がテープでロックを鳴らしていた。ぴたりくついた若い女は男の背をしつかり握つていた。

若者の横に立ち、白波と明りのつき始めた街々の連なりを眺めた。

激しいリズムが続き、若者とその恋人は足で調子をとり、軸を上下に揺すつた。私も彼らのまねを少しした。

私の耳に馬を追う村人たちの歎声が甦えつた。それはこの音楽よりももつと激しいものだつた。

若者はちらつとこちらを向き、恋人もその後に続いた。お互に顔を見合わせくすっと笑い合つた。

私は彼らから離れ、反対側の海を眺めた。海に夕日が沈むところだつた。何倍にも脹れあがつた太陽が波を桔色にしていた。

祭りの夕暮れも美しかつた。頬を火照らせた村人たちや馬の背に柔らかな黄色の陽が照り返つていた。

だが私はいつも憂鬱だつた。思いつきり熱気を発散させた友人たちの満足げな顔を眺め、何もしないでただぼんやりしていた自分を恥じた。今年こそみんなといつしよに思いつきり鞭を振り回してやろうと勢い込んで広場に登つていくのにいつもだめだつた。

友人たちはどんなにして馬の尻をぶつたか、馬が自分にどれほど近づいたか陽気にしゃべり合つた。若者たちも馬のたてがみにぶら下がつて走つた怖ろしさを興奮してしゃべりあつた。

馬を奉納しない私たち疎開組は縄の後ろの見物席にしか入れてもらえなかつた。だが、ほとんどの友人たちはそれを無視し、村の子どもたちといっしょに興奮していた。どうして私だけが縄の境を越えられなかつたのか。どうして祭りの熱狂に一体となれなかつたのか、今でも私

にはわからない。

「私、少し寒くなってきたわ」

妻が私のそばにやってきて、そう言つた。

「じゃ、船室へでも行つてたら。ぼくはもう少しここにいるから」

「そう、じゃ先に行つてるわ」

テープが終つたようだ。音楽が聞こえなくなり、あたりが静まつた。だが再び同じ曲がかけられ前と同じ騒がしさになつた。

「こんなところにいらつしやつたの」

突然後ろから声をかけられ、驚いて振り返るとあの髪の毛の長い女が優しく笑いながら立つてた。華やいだ眼、水のような膚、若さの匂い。私は緊張し、心臓が締めつけられるような気がした。

「久しぶりね」

私は何も答えなかつた。
「お忘れになつたの」
「いや、あのう」
私はどきまぎした。

「あなたつて、そういうお人なんですね」
「よく覚えてるんだけど、ちょっとその、ど忘れといふか……」

「さあ、思い出してください。あのときのことを」

「ほら、あのときよ」

私は女とホテルへ入つたときのことを思い出した。
女も私も裸になつてた。いよいよ私が女と交わろうとしたとき彼女が叫んだ。

「あなた後悔しないわね」

その言葉が私の力を一気に萎えさせた。女を嫌いになつたわけではない。劣情が消えたわけではない。ただ女を怖れた。女が得体のしれない不明なものになつたのだ。

だが、この女は彼女ではない。一度抱いた女を忘れるほど私はまだもうろくしてはいない。

「あなた、私にくちづけしたのよ。でも、私にしたのはそれだけ。あなたは約束したの。こんど会つたら必ず抱くって」

「人違いじゃないの」「こまかすつもり」

今まで優しかった眼が一気に鋭くなつた。
「私、中途半端は嫌いなの。」



